

有機農業先進地視察 概要

1. 日程：令和6年5月23日（木）・24日（金）

2. 場所：京都府亀岡市

3. 概要：

（1）23日（木）の視察内容

ア ハイパーアグリ社の実証水田

- ハイパーアグリ社の実証水田は、亀岡市本梅町西加舎清水田に位置し、同エリアは国営の区画整理事業である「亀岡中部農地整備事業区画整理事業」の区域内でもある。
- 実証水田では、同社のフィールドマイスターという装置が設置されており、ほ場の水をイオン化させることで、倒伏の軽減、収量の増加、雑草の抑制などの効果があるとのこと。
- 特に雑草の抑制は佐倉市内で取り組んでいる有機米の栽培実証においても重要な課題であり、新しいアプローチの一つとして検討に値する事例と考えられる。



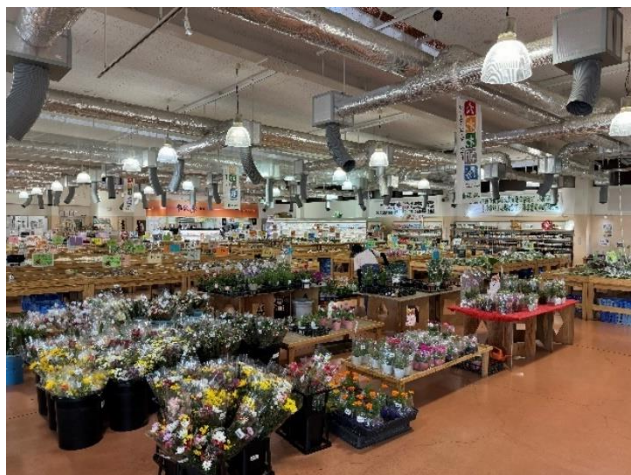
イ KIRI CAFÉ

- KIRI CAFÉ は、かめおか霧の芸術祭の拠点として 2018 年にオープンした交流スペースである。
- 古民家を京都芸術大学の学生とともに改修して作られた施設であり、亀岡市産のオーガニック野菜を生かした料理やドリンクを提供するカフェを運営するほか、農産物の直売や様々なイベントの開催スペースとしても活用されている。
- 飲食店との連携による有機農産物の活用促進の観点に加えて、佐倉市内における旧今井家や旧平井家といった古民家の有効活用の観点からも、参考にすべき優良な事例であると考えられる。



ウ ファーマーズマーケット たわわ朝霧

- 「ファーマーズマーケット たわわ朝霧」は、京都府内最大級の農畜産物直売所であり、農畜産物のほか、花きや地域の工芸品の販売も行っている。
- 直売所は有機農産物の重要な販路の一つであることから、SNS を活用した情報発信や調理例を示す POP の展示など、佐倉市内の直売所活性化の観点で参考になる事例であると考えられる。



(2) 24 日（金）の視察内容

ア 亀岡市役所での講義

(ア) 環境先進都市としての取組

- 環境先進都市推進部環境政策課の鈴木課長及び園田係長から以下のとおり説明があった。
 - ・ 亀岡市では、観光資源の一つである保津川下りの船頭によって始められた清掃活動を契機に、保津川の環境保全に取り組む NPO 法人の誕生や内陸部初の海ごみサミットの開催などを経て、2018 年に「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」を行った。

- ・ 「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」は、市長と市議会議長との連名で行われ、市が一丸となって取り組む姿勢を示すことができたほか、自然環境の保全と地域経済の活性化とを両立することを目指す点が企業に好意的に受けとめられたと考えている。
- ・ その後、協議会の設立や複数回の市民向け説明会を経て、全国で初めてプラスチック製レジ袋の提供を禁止する条例を定めた結果、現在では、ソフトバンクやユニクロ、カネカ、タイガー魔法瓶など、数多くの有名企業と連携協定を結ぶに至っている。
- ・ 連携協定は、企業側からの申し出によるケースが多く、条例制定の効果を強く感じている。

(イ) 有機農業に関する取組

- 産業観光部農林振興課の荒美副課長から、以下のとおり説明があった。
 - ・ プラスチックごみゼロに関する取組が一定の成果を上げ、軌道に乗ったことを踏まえ、別の角度から次なる環境負荷軽減の施策を行おうということになり、有機農業の推進に取り組み始めた。
 - ・ 主な内容としては以下のとおり。
 - ① 有機 JAS 認証取得支援（初回補助率 10 分の 7）
 - ② 農機シェアリングサービス（（株）クボタと連携した事業）
 - ③ 農機具購入補助（補助率 2 分の 1）
 - ④ 小学校や保育所の給食への有機農産物の活用（有機米は 18,000 円/30kg で購入）
 - ・ そのほか、市民団体等との連携状況は以下のとおり。
 - ① 「亀岡オーガニックアクション」
 - ⇒ 農家、飲食店、保護者、京大関係者などで構成される団体で、亀岡駅北側エリアでの有機米の栽培実証や勉強会を開催
 - ② 「自然派京都有機農業推進協議会」
 - ⇒ コープが事務局を務めており、定期的な意見交換や研修会・勉強会を開催
 - ③ 「かめまる有機給食協議会」
 - ⇒ 保育所等への有機野菜の納入や有機 JAS 講習会の共同開催
- また、亀岡クルベジファーマーズの井上氏（農家）から、「亀岡カーボンマイナスプロジェクト」に関して、以下のとおり説明があった。
 - ・ 「亀岡カーボンマイナスプロジェクト」の主な関係者と役割分担は以下のとおり。
 - ① 立命館大学・京都先端科学大学

⇒ 炭堆肥づくりや実験作物の選定など、主に技術面で協力。

② 龍谷大学

⇒ 食育・環境教育の展開など、主にソフト面で協力。

③ 亀岡クルベジ育成会（農家団体）

⇒ 実証ほ場の運営管理を担当。

④ 亀岡市

⇒ 総合的な調整を担当。

- ・ 京都という土地柄、インバウンドや外資系ホテルなどが多く、オーガニックや脱炭素への高い関心を実感している。
- ・ バイオ炭の生産にあたっては、持ち運びできる密閉型炭化器を使用しており、1,000 万円/台とかなり高価だが、作業効率が良い。
- ・ バイオ炭の散布は、米農家が協力してくれると面的にかなり広がるが、量を必要とするため、いかに供給量を増やすかが課題となる。
- ・ 供給量を増やすためには、散布する農家が全ての作業を行うのではなく、竹林整備には外部の協力を得るなど、役割分担をすることが重要になってくる。

○ 続いて、荒美副課長の案内で、亀岡駅北側エリア及び亀岡オーガニックスクールを視察。

① 亀岡駅北側エリア

- ・ 従来、度々氾濫する保津川の遊水地となっていたが、治水対策が進み、活用可能になったところに、京都府からスタジアム建設の話があったため、候補地として手を挙げ、底地用を買収を行った。
- ・ その後、スタジアムの建設地として決定したが、天然記念物であるアユモドキへの影響が問題視され、建設地を近くの別の場所に移すことになった。
- ・ その結果、買収した土地が宙に浮いてしまっていたところ、有機米の栽培実証等を含むエリア保全・活用案が浮上し、亀岡オーガニックアクションとの連携により取組が進められることとなった。



② 亀岡オーガニックスクール

- ・ 亀岡オーガニックスクールは今年の2月に開校したばかりで、株式会社バイオかめおかという企業に運営を委託している。
- ・ プロ養成コース、スタディコース、オンラインコースの3つがあり、定員や受講料は様々だが、特に市外在住者からの人気が高い。
- ・ プロ養成コースのスクール生は、平日は受け入れ先の農家で研修をし、週末に地域の集会所を借りて座学を受けている。
- ・ スクールの近くには1反歩程度ではあるが研修ほ場があり、主にスタディコースのスクール生が利用している。



(以上)